林麓農藝

完

中村俊定文庫
文庫 18
502

加賀金城の半化張士武上は波示
拔を引る祖翁の正道説ゴに
須臾見者もなく真者長伝示を
法々事を為さりを化ぶ草枝
ゴ歳ふ〻てい〻まゝ自私の風量を
拔ぬ拔際を私己らさまく素乳
風流示ゴ〻彩ゴ話に送ハ生

陵宝藏

宗教研究所図書

ゆも見まかしゝおれしゝ友氏
うゝ書くゝ云の葉をそゝ作なく
榮庵の主う育枝ゆかつゝふ歌小
たよ祭詩見ゝ子農詩をそふく
世小冊ゆおひ立夏ゝふりめ
出永年の初夏上も苔人松谷漫云

第五　長沼

えりや雲弟子も風靜　松谷
赤右ゆ青や一木の梅乃花　杏堂
何さ咲くも初夏ゝ見ゝ色　舟媒
夏夕に何いひおん河の釣　倚流
雲り羽ゆ右の青ゝ子ゝ夏　知東
青り新門杉枝も陰ゝり　盃川

中村俊定文庫

ねひやとまんの駒や苔の長　花繡

業さし絵新板を女うかと書ん　紫英

初雪やひかち出た川のうら畑　露竹

笠く姉人面白や七野の去　山雨

高年も老い羽ぶしや花乃春　知山

出る世八戸ふるさと浦の風の門下松ばさしむ

ちれと也老方の作也門の松　眉年

姉一人花咲時ちれ国の春　雨篁

知れ知りの咲も之の年色ル　菊睡

時鳥ゆ罪も子知りと野の春　河舟

俊義野市の栖り

何ぞ〳〵乗の松ル

也ぬいと蓬乃蟬

青海の旦いんとうもも

知れ知ル

蘆も実ぬと知れ小竜安の子也　栗庵

ぐゝ鳩

伊勢嵜藩中

玉の戸岩梅ふめり宿は春　亞白

江戸は春塘の春てふ小竹　西幸

さくらちるの事は恵方の春　菰葉

散る枝後しらぬ春を惜ふ
咲くさきを

己が身はおのれふかうるふ　汝子改　五嶺

春のまゝ〜濃くや紅　龍尾

袋を初や三面髮の禮出立　女花色

吹初春もさやかし紅　薫山

境町

橋吹はもゝりあをの屠　只聽

七種や葉〜赤もえくよし　茂畔

思ひ出る種さ後や福寿草　東境

掛鯛や立ぬ〜浪も帰る　女塚　欣橋

大間々

初日新国都ちとせの春の　百丈
門松に白び初ぬ雪北岳　爲東
麦畑の深雪深し雪の底　呉山
入り花を忘れぬ雪ふ　素簾
墨すり雪雲の入り筆始　爲一
雪吹立て山も宗に山の去　梧鳥

神も山を初ふ　初日拝　魚千
仏法を忘れ山の初氏　青牛

、

初宮や弥勒の弥も床しれ　沼和田　沼台
春の羽子や壹さ新、柳の先　沼芦
法号北声も宗に山の去　於宮　大者
曙や神の山に松ふ雪氏、　拳一

本庄宿

、

松賣屋門ち小記帥ゝ事　一馬

門松の言いきゝよる武蔵ち　頼尾

初雪や屋敷ち多く業の松　女川

うゝ化ゝさち言も同ゝ花芝　、文指

門くゝ小琴の声くゝ乃松帥　其室

西ち山月ち川ち知やち乃初　安子

、

鈴志流ち下ち記初言ち　金窪　示来

まゝ星も言門ち山て初乃　、伯雨

重ゝ星ち上ち初小ち言屋　勅使川ち　快馬

藤岡町

、

紫ゝや月ち雪ち筆如　文仰

言くゝち淵ち山ち乃北言ち　牧羊

所〻玉や斎せし蕎も出さうも　禾宜
孫高も物静かなる子たち　卜三
海原や明り長の長閑なる　栄宿
初春し身に移る文や苔の春　代賀

、

洋和也門に静かに松たる風　卜全
〻〻紫陽や初せし建簾　如酔

夢〻化生〻初の夢や門乃松　柏葉
本立山数山を里やさ川霞　白虎
旅人う祝ひ初せし夏八十九　枝邦
老宗さや苔の溪に落せし声　可夕
い祝ひの〻数松に梅せし蕾り急　其蝶

、

鶯の声の〻所ゆく〻み代乃春　松且

去年川と柳の糸も色かゆ　保水
為水の音も静かゆりにきと　岸松

年内立春　三句

万葉は木石町やまとうち　亞白
年もとや行去る砧　松谷
昔りや年は神木の落こすと　似柳

冬暮

里遠き神垣の松ゆ通る　夏蝶
行桂をわかし梢小ゆの梅　可夕
雑文丁去乃いさや冬青賞　枝邦
いおこのし生房も師走の宮神　公泉
りゆや入神の雪丁当は疎　松葉
分入る梅見年年年本樵　幽醉
村鶏のそこにも高年の市　卜全

、

きよもりくみたる木の橘詠み　栄宮

何ぞかくこゝもまこゝも和歌ぶり　牧羊

和歌ぶりを踏まぬ人在配　卜三

静かなる市は夕べもかゝる忘　米宜

門くや松さゝ和の風きゝ　文仰

住古し垣根の板や古は言　代賀

、

鍬掾や芝弟の名を等へ作　牧馬

長屋の松男こゝ川旭この家　伝丙

いとまなき戎何ぞも梅は自ひ色　示未

、

焚火くゝ屋掃舞の市仕舞　安子

豆腐や源のゝ掃ふ竹の敷　夏室

表あるもまゝ出ハ作法のうち　文指
武士の被ヶ方ハ拙買ふ也と急　川
年始礼ハ流ゝ為に似るハ　新尾
ひらゝけ京く半に鞍ヶ師ヶ家　一馬

、

あれハ有人の呼ハ何をすれ　餐一
南ハ儀の表も万ヶあれ　大者

年ヶ出ヶ物ヶ市　沼戸
隆盛ハ雪も信ゝ乃書　沼古

、

市ハ年ゝ酒砂も多ヶ年ヶ　青牛
寄樓枝ヶ市ハ年ヶ書　魚千
月多も都ハ板乃一本の郡　橋多
行ゝゝや大路ハ月牛車　多一

書きしの所之の市は書られ　素簾
只今年木横谷山京少　呉山
孫掃き祝ふ御の人この事　爲東
是事は為も出し度の言　広丈

、

鶯も菜を花を話し　冨士松　欣橋
古伊勢を無おしを言葉年の坂　東境

毛鳥の鶯を拾ふ何をこの事　茂畔
川を弘遠山の雲に見を言　只聡

、

儀まを孫化を祝を遠を云　萬山
古札の孫も拂ふを納を利　絶尾
云を物の跡何の為を の言　蔬葉
人を亦去を川の鶯を　西幸

年の矢はけ引も返さぬ雪ふり　亞山

、

簑毛も抜すて寒し枯木ふり　仙鳩

山鴉の樫乃焼師芝ふる　河舟

逢坂や冬も音川川の音　西笠

咲ふ竹ゆゆしの孫は寒桔　葉賜

折やまた垣の雪の阿芝哉　胥年

、

大雪に寒る宮に師芝の入ふり　知山

釣夕長やもれく寒の雨　山西

懸掛やこゝ寒寒猫此仮　只壽　弥市

云ふ田長の苔も年乃音　鶴年

蕙て梅折て添人衣ふれ　紫英

古ふ法仏人の刃年も師芝ふり　花蒲

君ヶ代や年始市女の唐衣　登川
取ちらせる小仰さも言に色　知来
色はなれ春来に機織言ゆり　倩流
夜毒く涼寿るのこれ年忘れ　東嬢
年の市破ヶ号買人場三人　李堂
市人よ新年も請くゆくの言　松始

去来

去の世話半言ふおりふまうせ色　亜公
孫子長年も引向るのるぶ　西華
喜ちゆや成菓揚ちゆ海と安　愈白
ちゆ屋小悪ちゆ新梅の亜れ竹　流葉
重食　てちくれ去言更ふきれ去の月　〃去野
玉ふの春を作ふ働ふ新　紆言
世ちゆちのちくて目もし松の来　育美

岩切に去ぬの比竹花は茂る　鶴亀
[illegible]も去はは日のもはは羽子の音　龍尾
春暮るる逸下駄く人は[illegible]　閑舎
男小鮒尾雪の[illegible]はは[illegible]　花色
俗と尺に孫為にたり去の雪　蓮山

遣手の鶯去のもり去は去　卜全

[illegible]川去音も去ぬは流の郭　圭楷
為時に梢を辰所[illegible]　牛尾
何と[illegible]を花は[illegible]　公尾
俗くるもの川茶は去の雪　安麦
羽子板や妹下うり立茶ひ　忌文
橋ゐ[illegible]は孫る寒も有は[illegible]　園里
山去の去[illegible]は原し雑の声　松絮

如こ宴了普請初る三月尓　如碎
老何老し簾も床し窓の梅　可夕
梅の蕾ち歌門や春ち風　枝邦
物活撥や幾代弾りぬる畑のえ　夏憬

、

春の野や雪ゝ打ち花ち　迂生
訪ち花い保山も弾る梅ち　素昌

雪もや、解しう雪了谷の春　公兒
辰り山や園ち巨の的ち春歳ち　牧羊
春の日也野中に松ち鶯ち　如砥
雲や空ち雲も春ち戎弁一筏　盧中

、

雪ち空や春ち祭嗜き、春の野　春室
初ま所ゝ物の彩り春の為　禾宜

強て賤き事い立仕物の意　石鼠

惜しくや掃除の跡はよし　民止

掃さや柳はちるかき鞠乃言　百支改　桃扇

山吹や繋こうかねの小提うち　梅七

散ちるとはもわすき梅ぶ　卜三

ゑくしと弁慶捜むる弁ぶ　栄宿

原作や菜の本はたはもの花　文仰

、

去の事や新はの小笹の影　大阪　代賀

繁はぶかちくるる橋ぶ　少女　いね

雪や何時ゆくも淺ゝり　如訪き　文寂

芝仲や蛙りこふ池色より　駿河　倭水

、

畑ちの歌こゆかく桃の色　釈　虹山

屋や水ぬるゝ細ふこの袴、　五竜
出くるかりたくしい流ある田螺ぶ　支柳
茎嶋うゝ所ぬもあの音色うか　以勇
耕うゝ家小田の畔なる菜ぶ　伝雨
おおあ流くうゝ春雨ぶ物の色　示来

、

長尿さや長乃中北流の音　枝馬

イとゝ又も林の蔭の蔭ぶ　沼芦
簑色の毛尿に生るるぶ　沼古
遠山ぶ屋のり糸も長うか　大者
烈くもうゝ立花の紅ぶ　蓉一

、

毛尿さ紙口無あ小まむ柳ぶ　秋　思江
うくのさや乃北蔭尿ぶ　公渕

よはたの柳の古枝を折て髪に
挿て社まゐりの日和の事
梅雨や海へ流る窪地畑
畑中の長時分やもち乃苔
川の音ちりにくるる紅葉哉
永々や年寄ふ人のきぬ
獵人の影小窓に鳴うち

加悦　雪室
あま子　文指
公水　
吉柳　
千湖　
雪母　
良氷

植込の新ふもちふ花と橋植ル
仲乃ゝ人のやきふ沙ゝ
寄信ふ別しう海苔の横竹
一三時毛吳寄青杉本り那
長閑ゝや和き信ゝ泡の新
切凡中の雨ゝ杉新樓ゝ

雪室
文指
ゝ川
太丕
新尾
一馬

押入り来る客者の門や梅ばな　扇旨

、

春の野を遠き霞時鳥　玉文

雲解して月やあき車　烏東

曙の空小雨の残りけり　呉山

鶯も遠く移ふやはぬるみ　爲一

角ぐむ蘆もくれふしの兎　素簾

山伏や野の日向に寝ぬ　耳谷

永々敷小笠掛ふ野の人　梧多

春雨ふる新屋の小浮　泉歩

繋ぐ流樹も春の雨色うち　有右

仮寝や雲に小鳥の梅ばひ　魚千

春しらも初紫のたみ北東　青歩

よい程に川も隔くなる山
庵しまて変あ小義ろ行山泉　尾芳　蕉堂
春文く柳に紫の咲小り、和夕
地子の勧うを芦地杉蒸小　境　文腸
京ろ小く和ろ京ろ京ろ京の子、東境
筑地ろも咲ろ川春の見ろ風、茂時
春柳や入わの清地静ろる、口聽

世社に杖引信も去色小　ろ尺塚　扇要
門畑や日たの子ろ作杉活、文好
春をこ色く松主人や鄙月、歓幸
凡巾切く春ろ川縄色小、冬扇
日ふまして子ろ芳川記世面小、五時
春解ろ尺別ぬ本の系信小　亀文改　一歌

人日

荊扉くゝ聖ゝ門ふ入て久保　上仁王　屑文

蓬萊の枝折もまぢかや爭菜　由戸

廣く空と解の春や野の動　臨皐

掃寄やさうれ立て秋に春雀　さか

何世とぶくて立の雨乃ふ　八平岩　甫山

乃ふや新さゝ立の浜沈の星　伯岩　秋　柏阜

苗代て青雲書の北東の形　雨堂

七草や小ふも約束の固北沈　菜脇

若竹や枯芝京て口出之り　育樣

やさしくも古菜を度う樂ふ　菜周

京京も忘仏果て物の意　素公

芳春く梅苔の志ふ　寧峯

砂のゝ題作る仏語も去りぶ　寒川

、

雲やたゝや声立む身つくろふ　秋雨

枯芝下小鳥鳴ぶ音ぶ　角兎

凍みゝ流音の音の蔭の歌　知山

、

ちゝくゝと松の陰鳴き出す　松堂

九十二番

雪解ゝ岩根ぶ小遠原ぶ　永嫁

毋ぶ出ぶ谷陰尖き菜立つな　侍流

夕陽紅埋川の音や去の子　消夕

鈎鳥や橋京出梢ぶ口鳴ぶ　樗同

日蔵隆百の夕ぶや啼蛙　山雨

海京下船乃り来や八重霞　紫英

隆ぶゝ夕ぶ拾ふ出や去の音　芝浦

敷妙なのたに蕚月秋ぶ　雪乎
吟花くち敷ぶ春の柳条　佐敷
山吹や雑子吟くれ河面は怪　才雅
鶯鳥や淋淋者り毛の音　崖花
長閑さや毛の毛の毛ふ日乃面　云和
罵花ふ流くぶ毛の雪解ぶ　古咄
毛吟ふ敷雪は云者ぶ　晩来

百毛ぶ垣種の毛加末孫者り　知来
敷穂し小子は上の樓う毛　盃川

滿春　四句

流水く斤迴末瓜は多日の雛　松谷
樓雛ふ加毛ぶの岩毛高は毛　河舟
雛も茶の毛形蕚ぶ末ぶ者毛　眉年
蕚ふ毛尾上の蹴沼毛ぶ梨　栗庵

表紙　文国

宮ゝの出ひやあらの雪　信陽　眠郎

道の色や春ふかく新菜子丹　浜東日光　雲路

藤浪やこうみくゝ松のこゑ　真八丁目　金英

九重ゝ出ゝ雲雀　武蔵西　蓮静

第旦　連系

長閑さや数の松ゝも初旦　伊勢岩戸　祇帖

かゝさくも花ゝ後栄牡、　素懐

山信や鈴ゝ松もゝ月夕氣、　芦堂

、

蕨ゝ野ゝ別ゝ清水及ゝ流　小木　東鶯

きゝく雲の月ゝ松福寿子、　橋別

出雲国ゝ寺ゝ門の松　境　柳戟

第旦

深掃く一日毒也毒也毒孔雀　柳眠

芙蓉かも立雑竹の中市　桔梗

流れ雪に埋まりて竹の中の東　東籠

、

横樽の古茶古に年寄也　芦雀

炉火も掃ふく焼しこ入り　素堂

例本積雪竹の節を折　祇帖

春興

ひらけやも春も春日の孤川京、連取　保曉

春雨や雪を掃寄茶の煙　宗宿　兩夕

降ふり降て笠に柳の、　不兼

豆腐やの口に柳の糸も結ひ　柳眠

春もやや蕨の芽吹口萌ふ　桔梗

蕨のこもの出ふの祝ひ　東籠

生立ちて首出でし夏や去の夏　蓮沼　桐宇

青柳や鏡立てかける傍　下乃寺　渤洋

青葉や吹いてもいの音　イセサキ　花凹

山寺出での細道ありける事解かず、　岱雨

、

小止みなく小雨あくなり去の夏　芦堂

柳ちる柳ちる柳ちる柳ちる柳ちる柳ちる柳ちる柳　素堤

青柳の眺めに小堤の出で張かな　祇帖

、

蛙の音に小魚呼んで通る竜　谷深谷　素山

口ずさむうたの田際かな、　木人

、

昆布出でし塩梅家しむ色の去　蝶阿

荒磯や海苔掻いて出でる　小鳥

庁園や春はなれぬ蝶　大阿

鞠の節よ蓋たゝるる半けん　甚化

蒲素

隅々もたゝぬ気ぬけくるるかな

半化坊

安永三甲午春　江戸室町三町目
須原屋市兵衛梓